

『虞美人草』 歴史篇

Junko Higasa

『虞美人草』という川の中を、東西の政権紛争歴史物語が流れてゆく。ひとつはギリシャ、ローマ、スコットランドを廻るシェイクスピアの「アントニーとクレオパトラ」「マクベス」「ハムレット」という西洋の歴史。そしてもう一つは桓武天皇から始まる平家物語である。ここでは奇数章の桓武天皇の歴史を追っていきこう。

まず第一章は叡山へ登る場面から始まる。外交官になる宗近君は潔く散る国花である桜の杖を何度となく振り回して、動かない甲野さんを叱咤激励して山頂へと導く。その桜が咲く京都の春は『牛の尿も尽きざるほどに、長くかつ静か』で、天武天皇の落ち玉える昔のままである。牛が表すのは牛頭天皇である。因みに『虞美人草』作中にはやたらと雨が降る。それはクレオパトラの純愛の風雨であるには違いないが、仏教でいう煩惱の風雨とも重なり、さらに風雨の象徴とされている牛頭天皇をも表す。いずれにしても風雨は人の心の乱れと権力の盛衰を物語る。そして叡山はもともと釈迦の教えを垂れる地域住民の自然信仰の山で、その釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神が日本の神仏習合の神である平安京の牛頭天皇であった。伝教大師(最澄)によって開かれた延暦寺は、神仏習合を推進して「祈祷によって現世利益を獲得する」天台密教の勢力を伸ばす。そこには事あれば神輿をかついで暴れて政治力を発揮した僧兵が置かれた。その貴族の支持を集めた延暦寺は、桓武天皇が頼みとした神社である。第六章で糸子が面白いと言った五重塔がある神社も後にこの延暦寺の下寺となっている。その後、明治維新の神仏分離によって牛頭天皇は弾圧され、天台宗の祇園社・天王社はササノを祭神とする八坂神社に再編された。宗教の変遷はそのまま政治変遷につながる。そしてまた文明の発展に伴う人々の道徳観にも影響を及ぼす。『虞美人草』の底には密かに「祇園精舎の鐘の声」という琵琶法師の声が流れてゆく。

そして第三章で『甲野さんは寝ながら日記を^つ記けだした』甲野さんは業平竹の庭から出る琴の音を聴いて『無絃の琴を聴いて始めて序破急の意義を悟る』と書く。業平竹すなわち在原業平は桓武天皇の曾孫、平城天皇の孫である。平城天皇は葛原親王の兄弟で、葛原親王は平高棟の父である。そして甲野家は桓武平氏、高棟王流で、甲野さんの日記は高棟流(「日記の家」=先祖代々の日記を書く)を意味する。また耳にしている琴の音は、都落ちの修羅場を描く能の『^{つねまさ}経正』で、平経正は琵琶の名手であった。ここでも平家滅亡の音がする。甲野さんは平高棟(身長六尺 180.18cm、美しいあごひげ、幼少の頃より聡明、古い伝記読破、晩年仏教に帰依)によく似ている。

そして次の第五章。『甲野さんも、宗近君もこの精舎を、尤も趣ある横側の角度から同時に見上げた』見上げたのは夢想国師が建てた堂である。夢想国師(疎石)は真言宗・天台宗を学んだが、母親は平家一門、あるいは源頼朝の鎌倉幕府の執権で桓武平氏の末裔である北条家の出と伝えられている。

そして第七章で『黒い影はなだれ始めた』平家打倒の陰謀は甲野家に近づく。この黒い影は第一章の保津川から見えた影であり、第一章の甲野さんの『あの山は動けるかい』と、この章の宗近君の『君は全く動かないか』という言葉は対を成す。叡山が動けるか動かないか、それは血脈維持に関わる。過去の京都の影と甲野さんたちを乗せた列車の窓からは富士山が見える。宗近君が『ちっと富士でも見るがいい』という

